

古池の句の弁

正岡子規

青空文庫

客あり。我草廬そうろを敲たたきて俳諧を談ず。問ふて曰く。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

の一句は古今の傑作として人口に膾炙かいしやする所、馬丁走卒もなほかつこれを知る。しかもその意義を問へば一人のこれを説明する者あるなし。今これが説明を聴くを得んか。

答へて曰く、古池の句の意義は一句の表面に現れたるだけの意義にして、復また他に意義なる者なし。しかるに俗宗匠輩がこの句に深遠なる意義あるが如く言ひ做なし、かつその深遠なる意義は到底

普通俗人の解する能はざるが如く言ひ做して、かつてこれが説明を与へざる所以ゆえんの者は、一は自家の本尊を奥ゆかしがらせて俗人を瞞まん著ちやくせんとするに外ならざれども、一は彼がこの句の歴史的關係を知らざるに因らずんばならず。古池の句が人口に膾炙するに至りしは、芭蕉自らこの句を以て自家の新調に属する劈頭へきとう第一の作となし、従ふてこの句を以て俳句變遷の第一期を劃かくする境界線となしたるがために、後人相和してまたこれを口にしたりと見ゆ。しかるに物換り時移るに従ひ、この記念的俳句はその記念の意味を忘られて、かへつて芭蕉集中第一の佳句と誤解せらるるに至り、終ついに臆おく説せつ百出、奇々怪々の附会を為して俗人を惑はすの結果を生じたり。さればこの句の真価を知らんと欲せば、

この句以前の俳諧史を知るに如かず、意義においては古池に蛙の飛び込む音を聞きたりといふ外、一毫も加ふべきものあらず、もし一毫だもこれに加へなば、それは古池の句の真相に非るなり。明々白地、隠さず掩はず、一点の工夫を用ゐず、一字の曲折を成さざる処、この句の特色なり。豈他あらんや。

客僅に頷く、いまだ全く解せざるものの如し。更に語を転じて曰く、我今子のために古池の句の歴史的関係を説くべし。子かつ子の胸中より一切記憶に存する所の俳句を取り去り、虚心虚懐以て我言を聴け。古池の句もこれを忘るべし。その外の俳句、芭蕉たると蕪村たるとに論なく、古句たると新句たるとを問はず、他人の作と自己の作と併せて尽くこれを忘れざるべからず。世人皆

俳句の発達せる今日の心を以て古池の句を観る、故に惑を生ず。

子今俳句いまだ発達せざる古に身を置きて我言を聴かば、必ずや疑を解くことを得ん。客曰く、唯々。

曰く、俳諧の歴史を説くは今我志す所に非ず。しかれども歴史を説かざれば古池の句を解すること能はず。故に古池の句を解するに必要なりと思惟する程度において古俳諧史を説かんとす。古俳諧史の無味乾燥にして、蠟を嚙むが如きは徒らに子の欠伸を催すに過ぎざるべきも、その欠伸を催さしむる処、便ちこれ古池の句を牽き出だす所以ならずんばあらず、子姑くこれを黙聴せよ。俳諧史を説かんとするには先づ連歌を説かざるべからず。連歌は十七字句と十四字句とを相互関聯して百韻を以て終るを普通と

する者、その間には月つき花はなの定座じようざ、打越うちこし、去さり嫌きらひ等の規定
 ありて、代々の連歌師皆力をここに用ゐたりといへども、我説か
 んとする所に要なければ言はず、ここにはただ連歌の発句を論ず
 るを以て足れりとす。連歌の発句と俳諧の発句とはほぼ同一の者
 にして、特に異ならざるべからざる理由ありて異なるに非ず。た
 だその発達上連歌は和歌より出でたるを以て、和歌慣用の言語材
 料を用ゐて自ら束縛そくばくし、区域を広くし材料を富ましむることを
 為さざるのみ。されば連歌の発句は到底陳腐と平凡とを免れず。
 古人を模倣し古句を踏襲し、同一の意匠と同一の語句とを並列し
 て敢て剽窃あえひようせつの恥を知らず、甚はなはだしきは自家集中にさへ同一の意
 匠言語を繰り返して以て自ら得たりとなすが如き、後世よりして

これを見れば、彼らは何処いづくに幾何の詩美を感得したるかを疑はざるを得ざるなり。連歌の盛んに行はれたる足利時代は和歌の最も衰微せる時代なり。和歌の最も衰微せる所以は、主として旧を貴び様に依り、師伝家流に拘泥して毫も真意を出だす能はざりしにあり。『新古今』以後門派の争ひ烈はげしく、形式を論じて實際に疎うとく、花はかく詠むもの月はかく詠むもの、千鳥の名所は何処どこどこ々に限り、某の語は某の処にのみ用ゐらるるなど規則づくめになりては和歌は今更に発達すべき寸すんげき隙すきだにあらずなりぬ。かく腐敗し尽せる和歌より出でたる連歌の発句は、和歌と共に腐敗しをるのみならず、詩形の小なるだけその範囲狭くなりて、腐敗はかへつて一層度を高めたる者あり。ある一方より見れば、新詩形を有

する発句は和歌の冗漫なるに比してやや新なる者を生じたる事なきにあらねど、それは極めて少数にして、大体は陳腐と平凡との堆た積いせきせる言葉の塊かたまりのみ。左に例を挙げて一斑を示すべし。

音聞かぬ雨知る花の雫しずくかな

心敬しんけい

雨晴れて花に色そふ夕かな

宗祇そうぎ

雨風も花の春をばさそひけり

宗砌そうぜい

さればこそ嵐よ雨よ花の時

心敬

春雨の庭にきのふの花もがな

宗祇

わくやいかに野は浅緑花の雨

宗養そうよう

花を見ば人無き雨の夕かな

宗祇

心あれや花の旅寐の春の雨

宗牧そうぼく

雨に猶なほ忘れぬ花の宿りかな

宗祇

春雨をしをれし花のなごりかな

同

雨にけさ明日咲かん花も盛りかな

宗長そうちよう

春のみかいくかもあらし花の雨

宗養

降りくらせあけなば花の春の雨

昌叱しょうしつ

時雨にも見ざりし花の千入ちしおかな

心敬

雨に花見ればこもらぬ枝もなし

宗長

染めいでよ花の木の芽の春の雨

宗祇

花や知る雨にはぬれぬ木陰かな

同

雨ならぬ夕も花の木陰かな

紹巴じょうは

花の色よるやそぼふる春の雨

同

紅くれないやふり出づる花の春の雨

昌叱

花咲けといはぬばかりぞ雨の声

失名

花咲けといさむるや聞く雨の声

紹巴

雨に又花をやどさん陰もなし

失名

山や花色なる雨の薄うすぐもり曇

昌しやうき

休ゆう

雨に咲く花はあわ雪の夕かな

紹巴

以上は花と雨とを配合したる句を列ねたるなり。大体において如何いかに同様の趣向にして、如何いかにつまらぬ趣向なるかは、一読し

て直ただちに感ぜざる者なかるべし。中にも「花咲けと」の二句は全く同趣向なり。心敬の「さればこそ」の句の如きは鳥なき里の蝙蝠こうもとやいはん。花の一題にては、いまだ尽さざるを恐る。更に月の句を挙げて如何にその変化せしかを見んとす。

雨ひとり月を思はぬ今宵かな

失名

星の名も一夜は立し秋の月

専せんじゆん順

雲霧も月にかくるゝ今宵かな

兼けんさい載

しぐれては雲も名に立つ月夜かな

宗砌

月今宵塵ちりばかりだに雲も無し

宗長

月に雲塵も付じの今宵かな

宗そうせき碩

誰も見よ名高き月は雲も無し

宗養

月を雲も妬^{ねた}みははてぬ今宵かな

宗因^{そういん}

今宵晴れて雲も名に立て秋の月

宗祇

名やあふせ月も一夜の天の川

肖^{しょうはく}
柏

月やあらぬ今宵を埋^{うず}む千重^{ちえ}の雪

心敬

日待の夜名月に

日影さへ待出る月の光かな

紹巴

草も木も月待つ露の夕かな

宗祇

月に住む人は今宵の空も無し

心敬

花は桜月は今宵のみ空かな

宗養

春は花秋は月にも今宵かな

昌休

月今宵古き都の空も無し

紹巴

月夜善しよゝの最中もなかの秋の空

専順

光をも天あめに満みたる月夜かな

生阿せいあ

秋こそと見し夜や今宵空の月

宗祇

月の名を雲居くもいに名のる光かな

同

四方よもに名は漏れ出づる月の雲居かな

宗碩

今宵やは同じ雲居の秋の月

昌休

空やあらぬ今宵光の秋の月

昌叱

名にしあふや今宵の月の都鳥

盛家もりいえ

いをねぬや水に最中の月の秋

失名

月残る一夜の松の木の間かな

失名

名をとほゞ桂や二木秋ふたぎの月

失名

名ぞ高き月や桂を折つらん

宗祇

一枝の桂やこよひ秋の月

肖柏

月は猶木の間にしるき今宵かな

宗牧

名や匂ひ月の花咲く草木かな

肖柏

水草のも中の秋は月清し

玄げんこう幸

月今宵玉も拾なぎさはん渚かな

宗碩

月や知る今宵は晴れし小倉山おぐらやま

宗祇

月の名にかへて小倉の山もなし

宗牧

月に名をかへぬもすむや小倉山

昌叱

連歌の発句の千篇一律なるはこれにても大方は推し量^おらるべし。最後に挙げたる三句が同じく「小倉山」と「小暗き」との縁語を趣向とするに至りては、その変化なきに驚かざるを得ず。しかれども上に掲げたる句には、月と他の有形物とを配合したる者多きを以て、なほ多少の変化あるが如く感ぜらるべし。もしそれ

名や光今宵ばかりの月もなし

宗砌

月やあらぬ似たる時なき今宵かな

同

一年の月をくもらす今宵かな

(?)

一年の影や今宵によるの月

宗祇

秋の月今宵は千代の光かな

同

曇るなよたが名は立たじ秋の月

同

名ぞ今宵おぼろげならぬ秋の月

同

秋の月名もことわりの光かな

同

心あらで月見は秋の今宵かな

同

月は秋あらん限りの今宵かな

宗長

月今宵はるかに照す光かな

同

行末も今宵や幾世秋の月

同

月に先名をさきだつる今宵かな

同

月今宵名は残りけり世々の秋

同

月今宵さても有ける光かな

宗碩

大方の月の名たての今宵かな

同

名を得つとならばかくこそ秋の月

同

今宵さへいくよわが世の秋の月

同

月も今日ねざる夜を待つ光かな

宗牧

心より月よりしるき今宵かな

同

過ぎぬるも及ばぬ月の光かな

同

名高さや猶末々の夜半の月

紹巴

入あとも名やは隠るゝ秋の月

同

惜むなよ今宵明けても秋の月

同

月今宵思ふことなき光かな

同

月今宵思へば変る光かな

同

といふに至りては、殆んど同じ句やら別の句やら一読して區別し
かぬるほどに相似相類する者、連歌の発句が全体に変化せざるは
いふまでもなく、各人各個の句が如何に趣向に乏しきかを見るに
足らん。

以上の例句は固より百が一にも足らざる者、しかもこれを見る
者その単調に飽かざるはあらざるべし。もし厖ぼうぜん然ぜんたる連歌大発
句帳を示して、この書冊が尽くこの種の発句にて埋められたるを
説かば、誰かその馬鹿げたるに驚かざる者ぞ。

連歌師がその力を尽したるは主として霞かすみ、雪、月、花、紅葉もみじ、

時ほととぎす鳥、等のありふれたる題目にして、その他の題目はその句

極めて少きを見る。今古池の句を論ぜんとする際、試みに蛙の句

を求むるに、連歌二百年の間わずか僅に

鶯のもろ声に鳴く蛙かな

紹巴

の一句あるのみ。いはんやこの句の如きも蛙の趣を言ひたるにはあらで、『古今集』の序をもぢりたる陳腐なる趣向に外ならざるをや。彼らの趣味が如何に幼稚なりしかは以て見るべし。

連歌の単調かく此の如し。如何に愚昧ぐまいなる足利時代の文学者といへども、半人一人のこれに不満なる者なからんや。連歌の最盛時代とも称すべき文明、明応わづかは僅に昨日と過ぎて、余勢なほいまだ衰へざるえいしよう永正、天文てんぶんの間わづかにありて、早く既に一転機の動かん

とするを見る。

山崎の宗鑑と山田の守武とは共に永正、天文の間に出でて連歌に不満なる者、しかして共に俳諧の上に新方面を開きたり。宗鑑が連歌に対する意見は別にこれを聞くを得ざれども、彼が連歌流行の中にありて独り俳諧に遊びたるは、俳諧の斬新は幾何か連歌の陳腐に勝りたるを感じたるなるべく、まさ將た彼の歌として伝ふる所の

つらん
 かしがまし此里過ぎよほとゝぎす都のうつけさぞや待

の一首にも、彼が尋常のようによつて依様画胡盧的をえがくの文人ならざりしこ

とは明かに現れたり。花はともかくも楽しき様を詠むもの、時鳥

はただむやみに聞きたき様を詠むものと規則的に定めて、少しも

自然の趣味を解する能はざりし当時の歌人連歌師をあざけ嘲りて「都の

うつけ」と呼びし彼は、必ずや連歌の活気なく変化なきをもどか

しく思ひしなるべし。守武もりたけは独吟千句を試みんとして、その連

歌になら倣ふべきか、俳諧を為すべきかに惑ひしは、連歌の千句は古

例ありてこれを作るにはばか憚る所なければども興味少し、俳諧の千句は

極めて興味ある如く思はるれども、古例なきがために自らはじ創むる

に憚る所ありしに因るなり。彼がこの二者の選択を自ら決断する

能はずして神の御籤みくじに依りたるに、御籤は俳諧を為すべしとあり

しとかや、すなわ便ち俳諧の独吟千句は成れり。これより先連歌師は時に俳諧の発句を成すことあり。例へば

再びまりこ鞠古川を渡るとて

まりこ川又渡る瀬やかへり足

どうこう道興

の如し。これらは固より一句の言ひ捨てにして、それさへ多くは見あたらず。宗そうかん鑑に至りては発句に俳諧を用ゐたるのみならず、連句の上にもこれを用ゐ、遂つひに集めて『犬いぬ筑波』の一書を成せり。しかれども五十韻百韻とまとまりし者はこれを作らざりしが如く、そのこれあるは守武に始まる。連句はここに用なし。今少

しく彼らの俳諧の発句なる者を研究せん。

宗鑑、守武の興したる俳諧は連歌以外に一の詩形を造りしにあらず、ただ同じ詩形に、今まで用ゐざりし俗語漢語を用ゐ、今まで歌はざりし滑稽の趣味を述べしのみ。俳諧は陳腐なる連歌に斬新の元素を加へ、窮屈なる連歌に広き区域を借し、まじめなる連歌におどけたる趣向を与へたり。しかれども俳諧は、無趣味なる連歌に興味を加ふる能はず、模型的連歌に写実を教ふる能はざりき。彼らは僅に滑稽の一方面を得たるに過ぎず、否、滑稽中の下等なる一部分を得たるに過ぎず、句の品格において趣味において、むしろ連歌よりも遙はるかに低き一体を興したるに過ぎず、文学者といはんには彼は余り無識なり。俳諧師といはんには彼は余り野卑な

り。しかれども彼が沈澱腐敗せる連歌を蕩揺して他日一新の機を与へたる功は、俳諧史上特に書すべき価値あり、随つて彼らの俚野なる句もまた一読せざるべからず。

彼らの俳諧、即ち滑稽を別てば大約三種となる。一は擬人法、または譬喩を用うる者、一は言語上の遊戯に属する者、一は古事、古語、鄙諺等の応用または翻案をなす者、これなり。その擬人法を用ゐたる者は

手をついて歌申し上ぐる蛙かな

宗鑑

いやめなる子供産み置けほとゝぎす

同

花の香を偷みて走る嵐かな

同

青柳の眉かく岸の額かな

守武

鶯の捨子なら啼けほとゝぎす

同

名のりてやそもくこよひ秋の月

同

撫子なでしこや夏野のはらの落し種

同

の類たぐいなり。

その外に譬喩を用ゐたる者は

月に柄えをさしたらば善き団扇うちわかな

宗鑑

声なくば鷺さぎこそ雪の一つくね

同

落花枝えだにかへると見れば胡蝶かな

守武

傘からかさやたゝえ鏡のけさの雪

同

の類なり。言語の遊戯に属する者は

なべて世に叩くは明日のくひ菜かな

宗鑑

真まんまる丸に出づれど永き春日かな

同

春寒き年

にがくしいつまで嵐ふきのたう

同

花よりも鼻にありける匂ひかな

守武

声はあれど見えぬや森のはゝきぐす

同

の類なり。成語を用ゐたる者は

花をしぞ思ふをりく、赤つゝじ

宗鑑

花よりは団子と誰かいはつゝじ

同

の類なり。（各種を同時に用ゐたるもあり）その浅薄にして野卑なる、固より論評を費さずして知るべし。

彼ら二人が始めたる俳諧は、彼らの自ら作りて自らたのしみに過ぎずして、一人の弟子もなく、かつ彼らの死後しば暫しは彼の遺志を継ぐべき人も世に出でざりき。足利氏と縁故深き連歌は足利氏の衰ふると共に衰へ、豊臣氏に至りて紹巴あり、僅にその命脈を保ちしも、太閤こう薨じ、紹巴没し、豊臣氏尋いで滅び、徳川まつりごと氏政を江

戸に執るに及びて、連歌は僅にその形骸けいがいを保つに止まり、しかして松永貞徳の俳諧一派は漸ようやく世に拮たがまらんとす。貞徳の俳諧は寛永年間に起れり。あたかもこれ徳川氏の基礎漸く固く、戦乱僅に熄やんで四民多くは平和を望むの時なりければ、無邪気なる滑稽、野卑なる俳諧も当時の嗜好しこうに合していたく世の持て囃はやす所となり、終ついには門末数十人、京に江戸にその勢力を逞たくましうするに至りぬ。加ふるに印刷業の発達は一般の学問いちじるしに著き進歩を与へたるが如く、俳諧もまたこれによりて都鄙遠境に波及し、忽たちまち未曾有みぞうの盛運に達するを得たり。これを宗鑑、守武らの自ら吟じ自ら聴き独り作り独り喜ぶに比すれば、形勢の変遷、時運の泰否たいひ、啻ただに月げつ鼈べつ霄せう壤ようじょうのみならず。しかれども貞門ていもんの俳諧を以て鑑武の俳諧に

比するに、一步半歩の進歩なきは勿論、むしろ一層野卑にして一層無味なる俳諧を為したるのみ。貞徳は鑑武を祖述せんとしてその糟粕そうはくを嘗なめたる者といふべし。

彼が一派の俳諧は、『犬子集』えのこしゆう、『鷹筑波』たかつくば、『毛吹草』けふきぐさ

を初めとして幾多の書冊に刊行せられ、山なす悪句は幾万といふ限りもなければ、これを思ふだになほ嘔吐おうとを催すの感なきにあらねど、かかる悪句が世に流行したる事を示さざれば、最後に至りて芭蕉の妙趣を感じしむること能はざるを以て、うるさくもその悪句を列挙してその一斑を示さん。子また欠伸をこらへてこれを聴かざるべからず。

滑稽の種類は前に説きたるとほぼ同じ。その擬人法に属する者

花に来る蝶や還城楽の舞

失名

とき遅き花にや雨の片びいき

永治

落ち行くは臆病風や花軍

失名

大はらは子をもち月か姫小松

失名

月の顔踏むは慮りよがい外がいぞ雲の足

親ちか重しげ

顔見よと月も笠脱ぐ光かな

失名

先まずふるは雪女もや北の方かた

重しげ頼より

雪も今いそがしぶりをしはすかな

林甫

その譬喩に属する者

遠山の松やさながら花のしん

遍へんじょう照の花のぼうしか花頂山

河の瀬の紋所かや花はないかだ筏

雲は蛇呑みこむ月のかへるかな

月弓にかゝりし雲やにぎり皮

月しろの総がまへとよ天の川

花といふ雪のつぼみか玉たまあられ霰

天と地の中なかいれわた入綿やふじの雪

弘嘉

日能にちのう

正信

貞徳

失名

望もういち一

正信

正依

その言語の遊戯に属する者

今日は花さくじつ迄まではつぼみかな

成安せいあん

人さそふ山路の花や大天狗

親重

花さんじさんぜぬ人の心かな

弘永

誰も秋の影をや胸にもち月夜

徳元とくげん

曇る夜や影言いはん月の友

失名

影たのめ慈悲は上より下くだり月

重頼

黄にあらではは雪白き朝かな

徳元

春咲くに百早梅ぞ雪の中

日能

その古事成語の応用に属する者

花のためや悪事千里の春の風
慶友

花の宴に見そむる朧月夜かな
永次

功成るや名とげて散りし花心
盛もりなが長

夜目よめ遠目笠の内よし月の顔
失名

三五夜の中国一ぞ安芸あきの月
弘永

武蔵野は今日はな明けそ秋の月
重供

富士のみか一夜にでくる雪の山
貞徳

雪花も木の根にかへる雪しづくかな
弘永

中には各種を雑まじへ用ゐたるも少からず。なほこの外に多少の例外なきにあらねど、その数極めて少きを以て特にここに挙ぐるの

要なし。

これらの句が連歌よりも更に趣味少く、鑑武よりも更に活氣に乏しきは一読して誰も知るべし。子、これらの句を見て、余が特に悪句を示したる者と誤解する莫れ。なか余は初はじめより句を撰ばず、ただ手当り次第に抜き出したるなり。もし百句を示せとならば百句を示すべし。千句を示せとならば千句を示すべし。しかれどもそれは徒いたずらはんに煩を増すのみ。千句万句ことごと尽く皆この種の句たることを明言しなば則ち足らん。

足利の眠れる世すら連歌の单调に飽きて俳諧を興しし者あり、徳川の天下全く定まり、文運日を追ふて隆盛おもむに赴く時あたに方りて、木くづ竹ぎれにも劣りてつまらぬ貞門の俳諧がいつまでか能く人

心を喜ばしむべき。寛文に至りて変ぜんとしていまだ変ぜざる俳諧は、延宝に至りてやや変動し初めたり。西山宗因は起つて談林派を唱へたり。是（ここ）において貞徳時代の幼穉（ようち）なる俳諧は全くその跡を絶ちぬ。談林の俳諧も滑稽の区域を出づる能はざるは貞派と相似たり。これを貞派に比すれば幾分の趣味を増したる点において、一句の結構に活気を生じたる点において、一段の進歩を為したるを見る。

擬人法は貞派俳諧の慣用手段なれども、談林には殆んどその跡を絶ちたり。たまたま

葉茶壺やありとも知らで行く嵐

宗因

天も酔りげにや伊丹いたみの大灯籠

同

白露や無分別なる置き処

同

蛇柳や心のみだれ飛鳥あすか風

露草

の如きありといへども、その間既に多少の趣味を含むこと、彼貞かの派の乾燥に比すべくもあらず。譬喩の句は

松に藤蝸木たこぎにのぼるけしきあり

宗因

もちに消ゆる氷砂糖か不尽ふじの雪

同

錦手や伊万里いまりの山の薄紅葉

同

鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな

同

蓬菜ほうらいや麓ふもとの新田ほしいわし 干ほしいわし 鯛ほしいわし

栄えいせ

政い

呉竹くれたけや大根おろしの軒の雪

心色

是は又水の月とる麩ふ売なり

未計

の如き、中には奇抜なる者、輕妙なる者もあり。花といへば必ずこれを雲たに喩たとへ、雪と言へば必ずこれを綿たに喩たとふる連歌派、貞徳派よりは、たしかに一歩だけ深く文学に入りたり。

言語の遊戯を主とする者は

江戸を以て鑑かがみとすなり花に樽

宗因

うつり行くはやいかのぼり紙幟のぼり

同

かけまくもかしこやこゝの踊かな

同

宇治橋の神や茶の花さくや姫

同

花や上野とつはた本もとの人家迄

似じ春しゅん

の如し。古事古語の使用は談林一派の生命ともいふべく、彼らが作句の一半はこの部に属すべき者なり。その例

からし酔にふるは涙か 桜鯛さくらだい

宗因

世の中よてふくくとまれかくもあれ

同

古歌に曰く千ちとせぞ見ゆる鏡餅

同

有明の油ぞ残るほとゝぎす

同

涼風や猶ながらへば小石川

同

前にありと見れば螢のしりへかな

同

天にあらばひよこの羽根も星の妻

同

雁啼かりないて菊屋のあるじのわたり候か

同

今こんといひしは雁の料理かな

同

冬構へ一にたはらや炭俵

同

思ひつゝぬればや壁も雪の色

同

やどれとは御身おんみいかなるひと時雨

同

富士の烟耳けむりに消えけりほとゝぎす

如萍

もみぢ葉や花なき里の二三月

安昌

ほととぎす
郭公

来べき宵なり頭痛持

ざいしき
在色

かわたび
革足袋

の昔は紅葉踏み分けたり

いってつ
一鉄

貞派の好んで俚諺りげん、俗語を用ゐしに変わりて、これは好んで和歌、

謡曲を用ゐたり。これ談林が品格において既に貞派まさに勝りたる所以なり。

守武死およそ後凡八十年にして貞徳起り、貞徳起りし後凡三十年にし

て談林起る。時勢の進歩にわか俄に速度を加へて、今の十年は昔の百年

に当り、三日見ざれば刮かつもく目して待つこの時、趣味において品格

において句法においておのおの一步を進めたる談林が、更に一步

を進むるがために豈あに三十年にっしの日子まを俟つべきや、談林勃興後十年

ならずして、談林は既に衰へ、人々新を競ひ奇を争ふの極、日進月歩、文運復興の機運は漸く熟せり、延宝の末年、其角、杉風が作りし句合の如き、なほ滑稽を離るる能はざりしも、言語の遊戯に属する滑稽は早く跡を斂めて、趣味の上の滑稽を主とするを見る。これ滑稽中の高等なる者なり。

青柳に蝙蝠かわほりつたふ夕ゆうばえ栄なり

其角

蚊遣火かやりびに夕顔白しだいくは

同

夢となりし骸骨踊る荻の声

同

木がらしとなりぬ蝸牛のうつせ貝

同

しほらしき物づくしちよろぎ搔割菜かいわりな

杉風さんふう

夕かな雨 杜ほととぎす 鶉 坐禅豆

同

だい 〳を蜜柑みかんと金柑わろういわくの笑て日

同

曙あけぼのや霜にかぶなのあはれなる

同

右の中には滑稽を離れたる者すらあれども、必ずしも全体にしかるに非ず。こは比較的佳句を抜きたるなり。越えて三年、天和てんな三年に『虚栗集』(其角編)世に出でたる時は、一般の俳句全く滑稽を離れて、僅に雅致を認めたるが如し。俳諧漸く正路に向へり。しかれども意匠の粗笨そほん複雑にして統一せざる、語句の佶屈きくくつ聲牙ごうがにして調和を欠きたる、いまだ達せざる者一步なり。例句

礼者敲門齒しだ暗く花明かなり

幻吁

からかさ

傘にねぐらかさうやぬれ燕

其角

ほととぎす

山彦と啼ク子規夢ヲ切ル斧

素堂

青さしや草餅の穂に出でつらん

芭蕉

月に親しく天帝の壻むこになりたしな

才さい丸まる

栗柿は塵ちりつぽ壺を秋の行くへかな

仙せん風ふう

きり／＼す鼠の巢にて鳴き終りぬ

嵐雪

松原は飛脚ちひさし雪の昏くれ

一いっし晶しょう

これらの中にはほぼ完全せる句もあり。また語句佶屈に失すれどもその趣向は殆んど俳諧の骨髓を得たる者もあり。この時の俳

諧界は曙光わすか纒かに上りて万物始めて弁わずべきが如し。しかれどもこれらの俳人が佳句を作るは作らんとして作るにあらず、否、作らんとして出来そこなひたる者には非るか。もし吾人が今日より評する所の佳句なる者が当時にも佳句と目せられしならば、この種の句こそ多かるべきに、實際はこれに反して佶屈聲牙なる句の多きを見れば、その佶屈聲牙なる者が一般に賞讃せられしや疑を容れず。正しょうふう風ふうの萌芽もが発はつせんとしていまだ発せざるなり。たまたまに佳句あるは半ば偶然のみ。

翌しゅうきよう貞しん享きやう元年『冬の日』の撰集あり。芭蕉の『野のざらし紀行』あり。『野のざらし紀行』の句を見るはこの際最も必要なり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

芭蕉

秋十とせ却て江戸をさす故郷

同

霧しぐれ不尽を見ぬ日ぞ面白き

同

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

同

道の辺の木槿は馬に喰はれけり

同

馬に寝て残夢月遠し茶の煙

同

三十日月無し千とせの杉を抱く嵐

同

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

同

蔦植ゑて竹四五本の嵐かな

同

秋風や藪も畠も不破の関

同

これらの句は『みなしぐり虚栗』に比して更に一步を進めたり。『虚栗』の如くそほん粗笨ならず、『虚栗』の如く佶屈ならず。しかれども句々なほ工夫の痕跡ありて、いまだ自然円満の域に達せず。芭蕉はこの時いまだ自然といふ事に気づかざりき。自然といふ事に気づかざりしたために一句の細工を免れざりしなり。蔦の句の如きやや自然なれども、「植ゑて」の語はなほ自然ならざる処あり。不破の句は句としては完全なれども、この種懐古の作は和歌にもなほあり得べき趣向なり。芭蕉はいまだ俳諧特有の妙処の存し得べきことを知らざりき。手の届かざること僅に一寸。

翌々じょうき貞享しょうきょう三年、芭蕉は未みぞう曾有の一句を得たり。

古池や蛙飛び込む水の音

これなり。この際芭蕉は自ら俳諧の上に大悟せりと感じたるが如し。今まではいかめしき事をいひ、珍しき事を工夫して後に始めて佳句を得べしと思ひたる者も、今は日常平凡の事が直ただちに句となることを発明せり。憂うき旅寐のはては野ざらしとなるべきかといふ極端の感懐、秋風に捨子が泣きてをるといふ極端の悲哀、かくの如き極端の事を、いはでは面白からじと思ひしは昨日の誤解にて、今日は、蛙が池に飛びこみしといふありふれたる事の一句にままとまりしに自ら驚きたるなり。馬と残夢と月と茶の煙とを無理に一句に畳たたみ込み、三十日みそかの闇やみと千年ちとせの杉とそれを吹く夜風と

を合せて十七字の鑄形いがたにこぼるるほど入れて、かくして始めて面白しと思ひし者が、翻然として悟りし今より見れば、これらの工夫したる句はむしろ「蛙飛び込む水の音」の簡單にして趣味あるに如かざるを知りたるなり。芭蕉は終ついに自然の妙を悟りて工夫の卑いやしきを斥けたるなり。彼が無分別といふ者、また自然に外ならず。試みに前に列举したる連歌以後幾多の句を繰り返し、この古池の句の如く自然なる者他にあるかを見よ。一句のこれに似よりたる者だにあらざるべし。似よりたる者だになしとすれば、とにかくに芭蕉は、今まで人の知らざりし処をつかまへたるは明あきらなり。自然といふ一事がある程度まで文学美術の基礎を為すは論を俟たず。自然の基礎に置かれざる文学が文学とするに足らざるは、連

歌と鑑武貞宗の俳諧との無味なるにても知るべし。縦よし自然といふ事が唯一の方針にあらざとするも、芭蕉が古池の句につきて感じたる処はこの自然にあり。彼がその後の方針は皆自然に向ひて進みたり。

かつこの句の題目が多く世人に忘れられたる「蛙」にある事に注意せざるべからず。蛙は和歌に詠めども極めて少し。（『万葉』にいふ「かはづ」は今の蛙に非るべし）連歌にも少きこと前にいへり。貞派の句には多少これあるも、蛙の趣を詠みたるにあらねば蛙の句とするに足らず。その蛙の句は古池を初はじめといふて可なるべし。今連歌以来古池の句に至るまでの蛙の句を列つらねて、蛙に対する觀念の変遷を知らしむるに便せん。

手をついて歌申しあぐる蛙かな

宗鑑

鶯のもろ声に鳴く蛙かな

紹巴

詠みかねて鳴くや蛙の歌袋

失名

立わかり鳴くや蛙の歌あはせ

失名

苗しろをせむる蛙のいくさかな

未満

和歌に師匠なき鶯と蛙かな

貞徳

鶯と蛙の声や歌あはせ

親重

やり水のついたかいたく鳴く蛙

宗俊

おほて出て田顔あらすないもがへる

盛親もりちか

河かわ中なかで蛙が読むやせんどうか

重頼

降れば鳴く蛙の歌や雨中吟

寛記

くちなはも歌にやはらげ鳴く蛙

弘永

水口に蛇や見ゆらん鳴く蛙

みつしげ
光重

ふけ田なる蛙の歌やぬめりぶし

さだとき
定時

いくさ場のときの声かや鳴く蛙

信相

長く鳴く蛙の歌や文字余り

永治

歌いくさ文武二道の蛙かな

まさあきら
正章

呪ひの歌か蛇見て鳴くかへる

うじとし
氏利

許せ蛇けふの日ばかり鳴くかへる

かけい
可慶

吞まれなよ軒の蛇じやばら腹に蛙また

いちわ
一和

歌よむは短冊の井のかへるかな

いっせつ
一雪

釈教の歌か寺井に鳴くかへる
音ねに鳴くは伊敷いじきが淵ふちの蛙かな

玉の井の蛙の声もうたひかな

歌よまであるはたくら田の蛙かな

つらね歌の点料かおのが蛙銭

蛙いくさ井せい干行かんこうの備へかな

地獄谷の蛙は修羅のいくさかな

生いきしに死は閻浮えんぶにかへるいくさかな

打ち出でよ蛙いくさに鉄炮津

河原いくさ四条によるは蛙かな

赤蛙いくさにたのめ平家蟹へいけがに

閑節かんせつ
利直としなお

秀辰

将和

資仲すけなか

破扇はせん

之也

直安なおやす

一雪

同

同

立田川紅葉や朽ちて赤蛙

才さい磨まろ

歌さへぞしなびたりける干蛙

爾木

から歌を加賀にやはらぐ蛙かな

楓興

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

右はほぼ時代の順序に従ふて記したる者、かつ大かたの句は悉ことごとく挙げたるなり。悪句また悪句、駄洒落だじゃれまた駄洒落、読んで古池の句に至りて全くその種類を異にするの感あらん。芭蕉の自ら感じたるもここなり。少くとも芭蕉は蛙なる一動物の上に活眼を開きたり。しかれども芭蕉が、蛙を以て特に雅致ありて愛すべき者と思ひたり、と誤解する莫なれ。蛙は鶯の如く愛すべき者に非ず、

時鳥の如くなつかしき者に非ず、雁の如くあはれなる者に非ず、秋鳴く虫の如く淋しき者に非ず、故に古来の歌人も蛙を詠むこと鶯、時鳥、雁、虫の如く多からざりしなり。ひとり芭蕉に限りて百鳥百虫に勝りてこれを愛すといはんや。かへつて余り美しくも可愛くもなきその蛙すらなほ多少の趣致を備へて、俳句の材料たるを得ることを感じたるなるべし。蛙既に雅致ありとせば、鶯、ほととぎす鶻、雁、虫は言ふに及ばず、あらゆる事物悉く趣致を備へざらんや。芭蕉が蛙の上に活眼を開きたるは、即ち自然の上に活眼を開きたるなり。その自然の上に活眼を開きたる時の第一句が蛙の句なりしは偶然の事に属す。俗宗匠輩がこの句を説くに、特に蛙に重きを置くは固より取るに足らざるびゅうけん 謬 見のみ。

古池の句が俳諧の歴史上に珍しき句なることは、前に挙げたる
 例句によりて知るを得べし。されば芭蕉の俳諧はこの一句を限界
 として一変せり。従つて当時の俳諧界もまたこの一句を中軸とし
 て一転せり。縦たとい令事實はしからずとするも、芭蕉は爾しか感ぜり。
 故に芭蕉の將まさに死せんとして門人その辞世の句を問ふや、芭蕉答
 へて曰く

昨日の発句は今日の辞世、けふの発句は明日の辞世、吾生涯
 いひ捨てし句は一句として辞世ならざるはなし。我辞世いか
 にと問ふ人あらばこの年頃いひ捨て置きし句いづれなりとも
 辞世なりと申し給はれかし。諸法從來常示 寂滅じやくめつ相そう、これ
 は釈尊の辞世にして一代の仏教この二句より外はなし。古池

や蛙飛びこむ水の音、この句に我一風を興せしよりはじめて
辞世なり。その後百千の句を吐くにこの意ならざるはなし。

ここを以て句に辞世ならざるはなしと申し侍るなり。

といへり。「その後百千の句を吐くにこの意ならざるはなし」と
は、古池の句と共に感得せし自然的趣味によりて一生俳句を作り
たりとの意なり。芭蕉が古池の句を蕉風の境界線と為ししは自ら
明言する所なれども、芭蕉はこの句を以て自家集中第一等の句な
りとは言はず、芭蕉の爾か言はざるのみならず、門弟もまた爾か
言はず、去来は最も深く芭蕉に教へられし者なれども、古池の句
につきて何をも言はず。支考の如く芭蕉を本尊にして自説を誇張
する者すら、（『十論』の引例に出だしたる外）古池の句を批評

したることなし。しかるにいつの頃よりかこの句を無上の佳句なるが如く言ひなし、はては不可思議なる説をなす者加はりて、その広く世間に知らるると共に一般に誤解せらるるに至りたり。芭蕉は自ら、古池以後いづれの句も皆我句として人に伝ふべしとさへ誇れるに、後こうじん人が特に古池の一句を揚あぐるを聞かば、芭蕉は必ず不満なるべし。余らもまた古池を以て芭蕉の佳句と思はず、否、古池以外に多くの佳句あるを信ずるなり。客、領かんして去る。

(明治三十一年十月—十一月)

青空文庫情報

底本：「俳諧大要」岩波文庫、岩波書店

1955（昭和30）年5月5日第1刷発行

1983（昭和58）年9月16日第2刷改版発行

1989（平成元）年11月5日第3刷発行

初出：「ほととぎす 第二巻第一号、第二号」

1898（明治31）年10月、11月

※「飛びこむ」と「飛び込む」の混在は、底本通りです。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。

入力：酒井和郎

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

2016年9月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古池の句の弁

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>